

# 日本図書館学校においてレファレンス教育に 使用された渋谷国忠論文の考察

前 川 和 子

## 要 旨

日本図書館学校 (Japan Library School 以下、JLS) は、日本で初めての大学学部レベルの図書館学教育が行われた。R. ギトラー (Robert Laurence Gitler, 1909-2004) が主任となり、アメリカから4人の教師と1人のライブラリアンが招聘され教育にあたった。そのレファレンスの科目では、担当者 F. チェニー (Frances Neel Cheney, 1906-1996) によって Mudge, Wyer, Bishop の各々のレファレンスの定義が紹介された。またこの科目では、日本の文献として渋谷国忠 (1906-1969) の「参考事務要論」、今沢慈海 (1882-1968) などが資料として使われている。これら日本の論文の何が評価されて、資料として使われることになったのか。本稿では、3人のレファレンス権威者とどのように繋がるのかを探り、渋谷の論文を評価したい。

**キーワード**：渋谷国定、レファレンスサービス論、日本図書館学校、  
Shibuya Kunisada, Reference service, Japan Library School

## 1 はじめに<sup>1)</sup>

石井敦の『簡約日本図書館先賢事典 (未定稿)<sup>2)</sup>』によると、渋谷は長野に生まれ、1928年明治学院卒業、同年横浜市図書館就職、1943年前橋図書館、1961年同図書館を退職した。「戦後 JLA 評議員、公共図書館部会などで活躍、また筆名「竹越三男」で萩原朔太郎研究会の中心人物だった」とある。『郷土所在萩原朔太郎書誌』(1954)の著作がある。渋谷は戦前から活躍し、図書館活動の面からも業績の面からも優れた図書館員であった。彼の「参考事務要論」は、戦後すぐ開設され、当時のアメリカの最新思想を教育した JLS のレファレンスの講義で使用され、また図書館員に司書等の

資格を与えるための指導者を養成する図書館専門職員指導者養成講習会（以下、図書館指導者講習会）においてもレファレンス教育に用いられた<sup>3)</sup>。後者の開催場所は、JLSの所属する慶應義塾大学であった。どちらの場合も、レファレンス教育を担当したのはF. チェニーであった。本稿では文献を中心に考察するが、その中には、ヴァンダービルト大学図書館に保存されている Special Collections の “Brainard and Frances Neel Cheney Papers”（以下、「F. チェニーのファイル」<sup>4)</sup>）も含まれる。

## 先行研究

日本にレファレンスを紹介した先人たちの足跡は、今沢慈海らから始まる。その先人たちの足跡をまとめた研究として、三宅千代<sup>5)</sup>、北原國彦<sup>6)</sup>などのものがあるが、それらの中で、特に渋谷についての紹介論文を探る。

馬場俊明は「当時の図書館界は、旧体制の指導者が組織した「金曜会」という在京近県の図書館関係者が中心となり、CIE 担当官、文部省らと重要な図書館問題に関し懇談会を定期的開催していた。かれら主流は、文部省が非公式に依頼した若干名の委員（中田邦造<sup>7)</sup>、河合博<sup>8)</sup>、岡田温<sup>9)</sup>、加藤宗厚<sup>10)</sup>、大佐三四五<sup>11)</sup>、渋谷国忠<sup>12)</sup>）を任命し、公共図書館法案の制定に動いていた<sup>12)</sup>」。岡田は当時、帝国図書館員の立場から、「図書館法」作成などに関わっていた。渋谷は第二次世界大戦後の日本の図書館界において、戦前から既に主流とみなされていた人々の中に位置づけられる一人であったようだ。この文章にある「金曜会」は、日本図書館協会が主催したものであった。岡田温は、金曜会メンバーに関する記述を残している<sup>13)</sup>。（別表1参照）堀越崇「キニー研究序説」<sup>14)</sup>によると、キニーの提案により1947年2月に、第1回金曜会が放送会館5階会議室で開かれたとある。同論文は、金曜会の性格を、「図書館制度改革委員会と金曜会は図書館法案審議の舞台となり、日本図書館協会懇談会は協会「改革」を担うことになった」

別表1：金曜会メンバー

宮川 貞二 (早大図書館)
柄沢日出雄 (慶大図書館)
毛利 宮彦 (大泉文庫)
河合 博 (東大図書館)
山口 康助 ( )
竹内 善作 (大橋図書館)
中田 邦造 (日比谷図書館)
林 靖一 ( )
岩淵兵七郎 (衆議院図書室)
熊原 政男 (金沢文庫)
岡田 温 (帝国図書館)
舟木 重彦 ( )
石黒 宗吉 ( )
吉田 邦輔 ( )
岩井 大慧 (東洋文庫)
荻山 秀雄 (元朝鮮総督府図書館長)
廿日出逸暁 (千葉県立図書館)
大佐三四五
衛藤 利夫 (日本図書館協会)
有山 崧 ( )
長島 孝 (文部省文化課)
兵頭 清 ( )
雨宮 祐政 ( )
キニー (C.I.E.)
マルハウザー ( )

という。しかし、岡田は「見方によっては、うまうまとアメリカの占領政策に乗せられたということも出来るが、…(略)…キーニー氏をはじめ…(略)…日本の図書館員の意見は十分に尊重してくれ、…(略)…逆に彼等の協力を得ることによって、…(略)…日本の図書館活動の振興を計ろうとした…(略)…<sup>15)</sup>」と記している。

## 2 JLS 開設以前の、日本におけるレファレンス紹介の歴史

### 2.1 日本におけるレファレンス紹介の歴史

三宅の論文は、<sup>16)</sup>「序説、今沢慈海先生の業績、毛利宮彦氏の研究、波多野賢一氏の発表、澁谷國忠氏の労作その他、結語」の構成となっていて、今沢慈海、毛利宮彦、波多野賢一、渋谷国忠を中心に述べている。三宅がこの論文で取り上げた人々とその著作は<別表2>の通りである。

北原の「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展<sup>17)</sup>」は、明治・大正期とあるが本文は昭和期についても言及している。この中で取り上げられたレファレンスサービスを日本に移入した先人と紹介されている人々を、JLS 開設直前までをリストにすると<別表3>のようになる。それらの中に、北原が指摘したアメリカ人思想家を加える。

別表2：日本におけるレファレンス文献（三宅千代二の論文から作成）

今沢慈海「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』1924
小谷「日比谷図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』1924
毛利宮彦『図書館学講座全12巻』1928-1929第4章「図書運用論」の第1節「参考事務の組織と実際」の(3) マッジ「参考図書の選択」
波多野賢一「図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』1929.4
毛利宮彦、田中敬『内外参考図書の知識』図書館事業研究会、1930
垂水延秀『日本叢書年表』間宮商店、1930
神波武夫『基本的参考文献目録』間宮商店、1931
天野敬太郎『本邦書誌の書誌』間宮商店、1933
波多野賢一、彌吉光長『参考文献総覧』朝日書房、1934
佐中茂「参考係（専任）の拡充設置は中央〔府県〕図書館目下の緊急要事」『図書館雑誌』1934.5
『傳記資料索引』日比谷図書館
澁谷國忠「参考事務要論」1939
※石黒宗吉 図書館職員養成所にて「参考事務」の講座を担当（本稿に要項を記載）
法貴三郎「レファレンス・システムに就いて」『読書』1948?
弥吉光長『図書の選択』理想社、1951
神田秀夫「参考台によりて」『びぶろす』1951
前野直定「調査機関から見た図書館組織」『びぶろす』1951
伊藤且正「公共図書館における参考事務の運営に就いて」『図書館雑誌』1951

別表3：日本におけるレファレンス文献（北原囿彦の論文から作成）

1916年（大正5）	毛利宮彦	p. 20
1924年（大正13）	今沢慈海「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務」	p. 20 ここに、Kroeger, Mudge の説を紹介
1926年（大正15）	小谷誠一「図書館に於ける参考事務」	
1930年（昭和5）	毛利宮彦「内外参考図書の知識」	Bishop, Dana
1930～1931年（昭和5～6）	植村長三郎「学校図書館経営概論」	『図書館研究』Wyer
1936年（昭和11）	毛利宮彦「図書の整理と運用の研究」	「内外…」のをそのまま転載
1938年？	田村盛一「図書館出納所ノ本質ト事務」	
1939年（昭和14）	澁谷國忠「参考事務要論」	『図書館雑誌』Wyer, Bishop p. 22
1940年（昭和15）	山下栄「医学図書館ニオケル雑誌利用法」	『図書館研究』米国の影響

北原は、「第2次世界大戦後のわが国図書館界が、その再出発にあたって模範としたのは、米国の図書館サービスである。」とし、中でも、CIE（民間情報教育局）図書館、昭和23（1948）年、連合軍総司令部に提出された Robert B. Downs による「ダウンス報告書」<sup>18)</sup>、昭和26（1951）年、JLS での米国人教授による講義等の影響を指摘している。志智嘉九郎も「第2次世界大戦後、レファレンス・ワークに関して、わが国の図書館関係者が最も深い感銘を受けたのは、昭和26年に日本図書館学校で行われた、2度にわたる図書館専門職員指導者講習会での Frances Neel Cheney の講義といわれる<sup>20)</sup>」と述べている。

受講生の一人、伊藤旦正の定義は、F. チェニーによって紹介された Margaret Hutchins の定義である。第2次世界大戦後のレファレンス・ワークも、戦前同様、あるいはそれ以上に、米国の強い影響を受けて始められることになったのである。「第2次世界大戦前のレファレンス・ワークと第2次世界大戦後のそれとの間には、概念に関する限り、大差はないのである<sup>21)</sup>」と北原は指摘している。

F. チェニーのファイルに、天野敬太郎が彼女に送った“A List of Articles on the Reference Work (in Japanese language) chronological order”<sup>22)</sup>が残されている。天野敬太郎（1901-1992）は書誌・解題で著名な人物である。Compiled by となっており、1951年11月の日付がある。F. チェニーに宛てたものであるため、リストはまず英語のタイプが打たれ、次に手書きの日本語が添えられている。（実物は図を参照）

日本語で書かれたところのみを書きだしてみると、以下のようになる。

毛利宮彦：個人と公衆図書館

小谷誠一 『迷道』より

今沢慈海：参考図書の使用法と図書館に於ける参考事務

小谷誠一：図書館に於ける参考事務

- 塚本勝雄：市立名古屋図書館の読書相談  
波多野賢一：図書館に於ける参考事務  
京橋図書館に於ける参考事務  
毛利宮彦：山王事務の組織と実際  
水本邦男：質疑応答館と<sup>23)</sup>（撫順図書館報）  
水本邦男：図書閲覧案内係としての所感（同上）  
竹中茂：参考係（専任）の拡充、設置は中央図書館目下の緊急要事  
大野沢緑郎：参考事務について（図書館講習所 学友会雑誌）  
竹内善作：拾七八歳の生徒と参考係（図書館事業）  
河野四郎：図書館参考事務の一考察（朝鮮の図書館）  
進昌三：学校図書館に於ける読書案内の実際  
澁谷國忠：参考事務要論  
吉野龍二：私の参考事務ノート（図書館研究）  
太田栄太郎：図書館と調査部  
法貴三郎：レファレンス・システムについて（読書）

以上がリストのすべてであるが、手書きの読み取れない部分があった。しかし、このリストは天野が専門家として作成した1951年現在のレファレンス・ワークのリストであり、収集した文献は当時ある程度の評価があったものと思われる。この点で、注目すべきではないか、と考える。リストのタイプされた英語の部分が、あちらこちらで手書きによる訂正がされていて、大変急いで作成されたものではないかと推測するのであるが、この時期に何のために天野がF. チェニーに送ったのかは興味あるところである。

金津有紀子は「戦前におけるレファレンス・ワークの導入<sup>24)</sup>」で緻密にそのあとを追っている。

## 2.2 JLS での Mudge、Wyer、Bishop の紹介

JLS の科目120では、配られたプリントの No.4 に、「three definitions, each by a leading authority in the field: この分野に於ける三人の権威者による三つの定義」として、Mudge (Isadore Gilbert Mudge, 1875-1957)<sup>25)</sup>、Wyer (James I. Wyer, 1869-1955)<sup>26)</sup>、Bishop (W. W. Bishop, 1871-1955)<sup>27)</sup> が紹介されている。

まず、Mudge のレファレンスワークの定義は、「The Reference Department of a library is that part of the system which is charged especially with the task of aiding readers in their use of the library, particularly in their use of the resources and books

within the library walls as distinguished from the withdrawal of books for home reading. 図書館の参考部とは読者が図書館を使う際に、殊に館内で資料を閲覧する際に助けを与える任務を特に負っている組織で、家庭で読むための本を貸出す仕事とははっきり区別されている」と、紹介している。

二人目の Wyer は、「Sympathetic and informal personal aid in interpreting library collections for study and research. 調べごとや研究をする人達のために図書館にあるものを説明して、親身になって助けをあたえること」と定義している。

三人目の Bishop は、「Reference work is organized effort on the part of libraries in aid of the most expeditious and fruitful use of their books. 参考業務とはその蔵書を最も迅速且つ効果的に利用出来る様に、図書館側が組織的に助けをあたえることである」と説明している。

### 3 渋谷とその論文紹介

#### 3.1 渋谷論文「参考事務要論」<sup>28)</sup>

渋谷の論文は、『図書館雑誌』に2回に分けて掲載された。この論文の目次は以下の通りである。

- 第一、参考事務の意義
- 第二、参考事務の組織と方法
- 第三、参考事務の対象たる公衆
- 第四、参考事務の係員
- 第五、閲覧案内
- 第六、読書相談
- 第七、狭義の参考事務

渋谷は、通常の閲覧事務の他に、「公衆から萬般の質問を受付けてその研究調査に対し資料文献上の助力を与へるとか、或ひは閲覧者が容易に適当な図書を見出し得るやう案内説明をあたえるとか…」などとよばれているのが参考事務に該当するとしている。昭和4年に波多野賢一が「図書館に於ける参考事務」<sup>29)</sup>において、参考事務は7項目に分かれるとしているが、すなわち、(1)閲覧人の案内 (2)読書または研究の手引き (3)パンフレットの整理、出納 (4)参考書の解題又はその目録の編纂、或ひは種々の索引の作成 (5)図書館管理上に必要な種々の調査 (6)閲覧統計の作成 (7)新聞、通信、雑誌社との連絡 であるが、渋谷は(1)(2)(4)を参考事務の主体とみる

べきであるとしている。そして、渋谷は論文の主文として、(1)閲覧案内 (2)読書相談 (或ひは読書指導)、(3)狭義の参考事務を説明をしている。

### 3.2 第2回指導者講習会<sup>30)</sup>とJLSで使われた渋谷論文

#### 3.2.1 第2回指導者講習会で使われた渋谷論文

「F. チェニーのファイル」に、第2回図書館指導者講習会で使われた渋谷の「参考事務要論」のプリントが残されていた<sup>31)</sup>。この渋谷の論文は、第2回図書館指導者講習会で使われたが、そこで使われたプリントには「小川修氏が抄録」と記されていて、プリントの枚数は7枚である。プリントには、Professor Frances Cheney の名前入りであるから、内容が講義に沿ったものであることが確認の上で使用されたと考えてよいだろう。渋谷論文を抄録にし英訳している。JLSのプリントの典型である英文と日本語の混在したもので、あるまとまりのある英文のすぐ下には、日本語訳が書かれているというスタイルである。その日本語訳は渋谷の論文から抜いているのかといえはそうではなく、英文に対する日本語訳が新たにされているのである。渋谷の論文の目次をすべて使用しながら、その中の肝心と思われる個所を、抜き出したものとなっている。この講義プリントの項目だけを書きだすと以下ようになる。つまり、論文の目次はそのままに使われている。

- 1 参考事務の意義
- 2 参考事務の組織と方法
- 3 参考事務の対象たる公衆
- 4 参考事務の係員
- 5 閲覧案内
- 6 読書相談
- 7 狭義の参考事務

#### 3.2.2 JLSで使われた渋谷論文

JLSで正規の科目の中で使われた渋谷論文の抄録がまた別にある。科目は120、Information and Bibliographic Sources & Methodsで、第6番目のプリントとして存在している。実は筆者の手元にあるものは第5期生がながく保存していたもので、第1期、すなわちF. チェニーの時のものではない。しかし、細野公男が言うように科目はほとんど内容の変化がなかった<sup>32)</sup>というので、このプリントを使用してもあながちかけ離れたものといえないであろうと考えられる。科目120では、学期中に33種類のプリントが配布された。その中の第6番目のプリントであった。こちらのプリントは

2枚にまとめられており、JLSではおなじみのスタイルであった英語に日本語がそえられているのではなく、日本語のみのプリントであった。目次の7項目通りに抄録がされている。「抄録者は文字幸子である」、と注があり、抄録者は別人である。第2回図書館指導者講習会のプリントが7枚であったのに比べ、英語が無いとはいえ2枚とコンパクトにまとめられている。渋谷論文をさらに簡単に要点のみをまとめたもの、しかもアメリカ人教師の許可を得たもの<sup>33)</sup>と考えるのが妥当ではないかと思われる。第5期のレファレンス担当アメリカ人教師はGeorge Bonnであった。

No. (6? 数字無し) 参考事務要論 澁谷国忠 (プリント2枚)

※「所蔵の記事を文字幸子抄録」とあり

No.7 Use of Reference Books and Reference Work in the Library by J. Imazawa 「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務」今沢慈海

- 1 参考書の意義
- 2 図書館に於ける参考事務
- 3 参考図書の研究法

このプリントは1～3の目次となっているが、もとの今沢論文には、2と3の間に「大学に於ける参考事務」「学校に於ける参考事務」の項目がある。

※「所蔵の記事を文字幸子抄録」とあり

### 3.3 渋谷のレファレンスに関する評価

F. チェニーの講義を受け、その影響のもと「日本に於ける参考事務とその文献」<sup>34)</sup>を執筆した三宅千代二は、渋谷を「その内容によって波多野氏の論文から受けた影響の多いことが伺われるし、波多野氏の発表から10年の年月を経た後の労作としてその空間を補って余りがある労作である」と評価したうえで、

第一は図書館を訪れる個々の公衆に対して、その研究調査上の助力を与えることであって、研究調査を代行するものでない。と述べ第二は係員に有力な館員の配置を説き、場所として目録室、出納台、書庫の三者に最も簡便に接触する好適のところを指し、目録の完備、殊に郷土資料に関する質問に容易に回答が出来ることを強調した。第三対象の分類では館員から何を引き出すかを意識している読者、漫然と尋ねる入館者の二様がある。と区分し、第四については波多野氏が挙げた事項以外に A. 快活に気軽に人に接するところ<sup>(ママ)</sup>、B. 博識で



あること、C. 勘を働かせること、D. 忍耐力を持つこと、E. ユーモアを解すること、

をあげているという。渋谷の場合、読書相談は参考事務よりより高度なものと説いているが、これは新しい見解であり注目に値するとしている。

北原の「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展<sup>35)</sup>」は、33ページにわたる大部な論文で日本におけるレファレンス・ワークの移入を検証しているのであるが、その中で渋谷は、「James I. Wyer の指摘する“保守 (conservative)”理論の強い影響が伺われ、彼の定義は W. W. Bishop のものであろうとしている。そして、渋谷が“自由 (liberal) 理論”の弊害として次のように述べていると紹介している。

参考事務の任務は、公衆に研究調査上の助力を与えることであった、研究調査そのものを代行することではない。この間の区別を無視することは、公衆の図書館認識乃至図書館訓練を誤る結果を来すと同時に、参考事務の能率を害し、乃至はそのサービスを公衆の広汎なる層に及ぼすことを阻害するに至るであろう。

と指摘しているのである。

金津の「戦前におけるレファレンス・ワークの導入」での渋谷の評価は、北原の指摘に賛同し、すなわち「渋谷は保守理論の影響を強くうけており、そのことは“参考事務の公衆へのサービスはどこまでも助力乃至相談相手であって、公衆の代わりに研究調査をしてやることではない。”とする文面からも明らかであるとしている。しかし、参考事務は…“一貫した方針によって統制し、常に失敗と成功の跡を調べてその方針を改良していく必要がある”とサービスの質の安定化をはかる観点から、組織の必要性を説いた点は評価できる<sup>36)</sup>」と記載している。

## 4 JLS で使われた今沢の論文

3.2.2 JLS で渋谷論文が使われたことを紹介したが、渋谷とともに日本語文献として今沢慈海の論文が使われた。「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務<sup>37)</sup>」である。1951年当時、今沢は千葉県成田図書館長であったとある。今沢の論文の目次は次の通りである。

参考書の意義

図書館に於ける参考事務

大學に於ける参考事務

學校に於ける参考事業

参考図書の研究法

JLSでは、参考書の意義、図書館に於ける参考事務、参考図書の研究法の3項目に絞って、1枚のプリントで配布されたようである。すなわち、プリントの目次は、

参考書の意義

図書館に於ける参考事務

参考図書の研究法

である。参考図書の研究法は丁寧に抄録されており、原文の内容が具体的に理解できるように抄録されている。このプリントの抄録も文字幸子が担当している。日頃よく使わない参考図書であっても、参考図書利用法の原則を知って予備的知識をもつことが大切であることが述べられている。その利用法の原則とは、表題紙を見て、内容の範囲、著者のこと、出版年月を知る。序文、諸言等を読み、内容をさらに詳しく知ること、その図書の特色、欠点、同じ問題を取り扱っている他の図書との比較をすること、3つめに、図書を次の観点から調べることに、それは編集方法、記載事項、参照、索引の完全さと正確さ、記述の性質、種類からである。自分の熟知している問題についての説明を読むこと、などのアドバイスが入っている。4つ目は、序文や論説を見る時にも、公正であるかを調べる、5つ目その図書が改訂版であれば、どの程度に訂正されているかを調べるとある。1冊の参考図書を見る目を養うための、具体的なチェック方法であるといえる。このプリントもまた渋谷のところで見たように、日本語のみのプリントである。レファレンスサービスを日本に移入した今沢を紹介するとき、この論文が中心となっている。この論文の特徴の一つでもあるといわれている、クローガーとマッジの紹介がある（さらに今沢が「参考書利用に関する案内書の二三を紹介して置こう」として最後にリストが掲載されているが、Hutchinsなどの名がある）が、JLSのプリントには、今沢の論文として彼らのことは何も抄録されていない。なお、参考図書の評価については、プリントのNo.8以後続いて取り上げられている。参考図書について理解することが、参考事務を担当するものとして最重要課題であると考えられていたことがわかる。今沢の論文はこのための序論として、JLSでは考えられていたのかもしれない。

## 5 もう一つの論文、波多野賢一：第2回指導者講習会で渋谷とともに使用された論文

### 5.1 波多野賢一の「図書館に於ける参考事務」

波多野賢一の論文は、『図書館雑誌』の1929年に公刊されたもので、目次は以下の通りである。

参考事務の組織

係員の選定

参考係の心得

波多野は参考事務の肝要なことは、文献を通じての閲覧者に対する案内であるとしている。「従事する者は、閲覧者の求むるところを明察し、閲覧者が如何に難しい面倒臭いことをいっても、決して嫌な顔をしてはなりません……正直、親切、敏速この三つがあれば、参考係としてはづかしくない人であると言えると思ひます。」と係の心得を述べている。

### 5.2 JLS における波多野論文

第5期生の科目120の配布プリントには、波多野の名はない。JLSのこの科目としての目的、すなわち参考事務とは何かを知ったうえで、レファレンスライブラリアンとして知っておかねばならない参考図書を学ぶこと、その評価方法を知ることが、この科目の目的であった。そこに、2つの問題が出てきたことを日本の学生たちは感じたのであろうか。1つは評価するうえでの参考図書の存在が日本には無い、少なくともアメリカに比べ利用者に参考事務を行う上で不足していることを、である。もう一つは、波多野と渋谷の参考事務における位置づけが、第2回指導者講習会ではぜひ日本人として学んでおかねばならないこと、と理解されていたが、JLSにおいてはその必要はないと判断されていたらしいこと、をである。誰がそれを理解し、日本語文献を見つけ出したのであろうか。アメリカ人教師にはある程度の情報は与えられていたであろうが、自らそれを見つけるということは不可能だったはずである。

## 6. 三宅千代二の二人の評価

本稿では戦前に書かれたレファレンスに関する論文がJLSにおいてレファレンスの講義に使用されたことを述べ、それらの内容のどの点が使われる理由になったかを

探った。ここで三宅千代二による2つの論文の評価を見てみたいと考える。三宅は第2回指導者講習会に出席しF. チェニーから影響を受けた一人であるからである。<sup>38)</sup>

三宅はF. チェニーの影響を受けて、「日本に於ける参考事務とその文献」を書き上げた。その中で「澁谷國忠氏の労作その他」の項目のもと、「…その内容によって波多野氏の論文から受けた影響の多いことが伺われるし、波多野氏の発表から10年の年月を経た後の労作としてその空間を補ってあまりがある労作である」との評価を与えたことは、3.3ですでに述べた。三宅はその上で、渋谷の論文の目次を示し、各々の内容を要約している。渋谷の論文内に波多野の論文についての記述があるが、それをも加えて両者への目配りがあることが伺える。読書相談においては、「…読者が最も適した図書を読むことが出来るよう指導すること、であると定義し、読書相談とは参考事務よりもより高度なものと説いてあって、この点は特に新しい見解として注目に値する」と、渋谷の独自性を評価している。

波多野に関しては、項目を「波多野賢一氏の発表」として、1928年「京都で日本図書館協会の大会が開かれ、その第三日（12月4日）竜谷大学の講堂で、当時日比谷の図書館員であった波多野賢一氏から“図書館に於ける参考事務”という題目の研究発表を聴くことが出来た。こうした多人種会合の席での参考事務に関する講演は我国最初の記録であろう。」と記されている。これが後の「図書館に於ける参考事務」の論文となる。三宅は波多野論文の半分を占める“参考事務の実際”を「波多野氏の生々しい体験記録であった。その根本思想は“図書館に於ける参考事務とは文献を通じて、読者のために行う案内で、文献を離れてはどんなに学殖識見があつてとうとうと卓見を述べても、凡そそれは参考事務の本質的な姿とは、可成距離がある”であつて、今澤、毛利氏等の前述のものと同調の発表であつたことに変わりはない」と記している。三宅の論文の構成は、

序説

今沢慈海先生の業績

毛利宮彦氏の研究

波多野賢一氏の発表

澁谷國忠氏の労作その他

結語

と、本論が4部に分かれている中、波多野と渋谷を取り上げていることが特徴と思われる。北原は、三宅論文について、「…三宅の研究が、その後大きな影響を及ぼすものであつた…<sup>39)</sup>」と記している。

なお、三宅論文には、「文部省図書館講習所では、現在上野図書館の閲覧課長である石黒宗吉氏が“参考事務”について講座を受持っていた。講義内容は知る由もないが、要項によるとして、以下のように要項を記している。講義の一端を伺うことができるとしている。貴重な資料であると思われる。

- 1 参考事務の意義と目的
- 2 参考図書
  - イ 参考図書の意義と種類
  - ロ 参考図書の選択と内容調査
  - ハ 一般参考図書と部門別参考図書
  - ニ 参考図書の収集と整理
- 3 参考事務の実際
  - イ 質問の取扱
  - ロ 資料の検索と提供
  - ハ 部門別参考事務の実際
  - ニ 書誌の編集
  - ホ 参考事務補助資料の作製
- 4 参考事務の組織
  - イ 参考事務の職員
  - ロ 参考事務の組織と管理
  - ハ 図書館相互間に於ける参考事務

## 7 まとめ

レファレンスサービスはすでに戦前から日本では移入され、一部実践もされていた。今沢慈海により命名された参考事務は、図書館人にどのように理解され第二次世界大戦後まで研究され続けられてきたのか、を文献を通して検証した。アメリカで生まれ発展したレファレンスワークを理解できていたかどうかは、定かではない。むしろされてこなかったと考えた方がよいようである。しかし、渋谷の論文は、戦前において当時のアメリカ図書館思想を正しく理解していたといえるようだ。三宅の論文は、第2回指導者講習会においてF. チェニーの講義を受け、レファレンスの考え方に深く影響を受けた結果作成されたものであった。渋谷の論文は、JLSの教材として用いられたことによって、その論文の真価がはじめて明らかにされたのではないかと考えるのである。

注

- 1) 本論では、引用の旧字体を、原則として新字体に訂正した。
- 2) 石井敦『簡約日本図書館先賢事典（未定稿）』石井敦, 1995, 150p.
- 3) 1950年の「図書館法」は司書・司書補を新設したため、講師（指導者）の養成が急務となった。文部省は図書館指導者講習会を、1951年6月から11月まで3回開催した。R. ギトラーをはじめとする JLS 教師が指導にあたった。
- 4) ヴァンダービルト大学の Special Collections: Brainard and Frances Cheney Papers は、全部で90の Box から構成されている。〔引用日：2011-03-06〕〈<http://www.library.vanderbilt.edu/speccol/cheneylist3.shtml>〉 この中で、F. チェニーの資料は Box56-Box90 に収められている。現物のコピーを日本図書館学校を中心に、ヴァンダービルト大学図書館より取り寄せた。
- 5) 三宅千代二「日本に於ける参考事務とその文献」『図書館界』3(3), 1952.2, p. 79-82.
- 6) 北原罔彦「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展」『Library and Information Science』No. 8, 1970, p. 17-49.
- 7) (1897-1956) 1940年に東京大学図書館司書官、1944年都立日比谷図書館館長。戦時中日本図書館協会専務理事をつとめた。前掲2) p. 102.
- 8) (1904-19??) 1934年東京大学助教授、1935年同図書館司書官。戦中・戦後日本図書館協会理事、監事をつとめた。とくにGHQとの折衝で活躍。前掲2) p. 48.
- 9) 1902年宮城県に生まれる。1928年東京帝国大学文学部社会学科卒業。帝国図書館嘱託を経て、司書・司書官部長。1959年同館司書監。1965年国立図書館短期大学学長となり現在に至る、と「執筆者紹介」にあり。『図書館界』19(3), 1967.9, p. 96.
- 10) (1895-1981) 1925年帝国図書館、1930年同司書、1940年富山県立図書館館長、1944年東京都立深川図書館館長、1947年文部省事務嘱託、1948年国立図書館館長、1949年国立国会図書館支部上野図書館長、1958年駒沢大学教授 前掲2) p. 45.
- 11) (1899-1969) 1921年満鉄本社図書館、1927年コロンビア大学図書館学部、1928年満鉄大連図書館、1930年同撫順図書館館長、1941年北支那開発会社調査局などを経て、1947年京都府社会教育課長、1949年京都学芸大学図書館事務長、1961年松下電器(株)史編纂室、1966年金蘭短大講師。多年大学図書館の発展に貢献し、図書館学の研究成果によって棋界の進歩に尽した、として日本図書館協会功労者表彰。前掲2) p. 32.
- 12) 馬場俊明『中井正一伝説：二十一の肖像による誘惑』ポット出版, 2009, p. 330.
- 13) 岡田温「戦後直後図書館界大変動期の回顧 (2)」『図書館界』20(2), 1968.7, p. 39.  
石井敦編『図書館を育てた人々：日本編 I』（日本図書館協会, 1983）に、明治以後18人の図書館人の評伝が掲載されている。この中で、第二次世界大戦後も活躍したと思われる人物は6人である。馬場が「金曜会」メンバーとしてあげた6人のうち、中田邦造のみが掲載されている。しかし、評伝の中には金曜会メンバーとしての活動の記録はない。
- 14) 堀越崇「キイニー研究序説」。三浦によると、堀越のこの論文は卒業論文である。筆者はwebで読むことができた。三浦太郎「占領期初代図書館担当者キーニーの来日・帰国の経緯および彼の事績について」『日本図書館情報学会誌』45(4), 2000, p. 141-154.
- 15) 前掲13) p. 39.
- 16) 前掲5)

- 17) 前掲6)
- 18) 1948年アメリカイリノイ大学図書館長ロバート・ダウンズが作成。正式には「国立国会図書館における図書整理、文献参考サービスならびに全般的組織に関する報告」
- 19) 前掲6) p. 22.
- 20) 志智嘉九郎『レファレンス・ワーク』明石出版, 1962, p. 42.
- 21) 前掲6) p. 23.
- 22) To Mrs. Cheney と書かれている。「F. チェニーのファイル」Box 64
- 23) 手書きの文字が読み取れず。著者を書誌データベースで検索してみたが見つけられなかった。
- 24) 金津有紀子「戦前におけるレファレンス・ワークの導入」『Library and Information Science』44, 2000, p. 1-26.
- 25) *Guide to Reference Books* を編集し、これを図書館の基本ツールとして定着させた。コロンビア大学図書館では、彼女の仕事を直接受け継ぐコンスタンス・ウィンチェル女史を始めとする多くの学術図書館員を育てた。(藤野幸雄編著「イサドア・マッジ」『図書館を育てた人々：外国編 I アメリカ』日本図書館協会, 1984, 216p.)
- 26) 著作に次のものがある。*Reference Work. ALA, 1930*
- 27) 著作に次のものがある。*The theory of reference work. Bulletin of the ALA IX, July, 1915.*
- 28) 渋谷国忠「参考事務要論(1)(2)」『図書館雑誌』33(1)(2)(230, 231), 1939, p. 10-15 p. 30-32, 48.
- 29) 波多野賢一「図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』110, 1929, p. 7-15.
- 30) 1951年に文部省主催で、図書館専門職員指導者講習会が3回開催された。第2回は、7月23日から8月31日に行われた。
- 31) 「F. チェニーのファイル」Box 64
- 32) 細野公男「図書館・情報学科40年をふりかえって」『Library and Information Science』no. 28 Special Issue, 1990, p. 4.
- 33) JLSでのレファレンス教育は、開学時1951年4月から1952年夏まではF. チェニーが担当し、次に1953年度はムーア (Jean M. Moore)、1954年度はスミス (Anne M. Smith)、1955年度はボン (George Bonn) と、アメリカからの訪問教授が担当した。
- 34) 前掲5)
- 35) 前掲6)
- 36) 前掲24)
- 37) ただし、プリントの注には、『図書館雑誌』の大正15年3月と書かれているが、実際の出版年は大正13年である。
- 38) 前掲6) p. 25. 「…と同様、志智の著作も、その影響力は強かったのである」と、述べている。三宅も志智嘉九郎も第2回図書館指導者講習会の受講生で、ともにF. チェニーのレファレンス教育を受けた。
- 39) 前掲6) p. 25.

参考文献リスト

- 1) 神戸市立図書館『書燈：神戸市立図書館報』「図書館学の理論と実際 29, 30号」「アメリカの図書館界：レファレンスを中心に 上下 62, 63号」
- 2) 木寺清一「図書館奉仕」(特集：戦後日本における図書館学の発展)『図書館界』vol.11. no. 2, p.64-63.
- 3) 長沢雅男「近代図書館におけるレファレンス機能」『Library and Information Science』2, 1964, p.173-187.
- 4) 長沢雅男「レファレンス/情報サービスの発生と展望」『Library and Information Science』6, 1968, p.39-51.
- 5) 長沢雅男「レファレンス教育の動向」『Library and information science』7, 1969, p.19-32.
- 6) 大山綱憲「Reference work の定義について：問題とその解決への道」『明石短期大学研究紀要』4号, 1974.
- 7) 彌吉光長「レファレンス・サービスの理論的基礎について」『図書館学会年報』27(1), Mar. 1981, p.18-30.
- 8) 中林隆明「19世紀アメリカ公共図書館の成立の一側面：レファレンス・サービス前史」『参考書誌研究』24, 1982.3, p.1-14.
- 9) 高山正也「慶應義塾大学図書館学科創立に関する主要資料の解題」『Library and Information Science』28 Special Issue, 1990, p.9-23.
- 10) 渡邊雄一「レファレンス・サービスの発展とその将来についての一考察」『佛教大学大学院紀要』28, 2000.3, p.133-147.
- 11) 金中利和「ジャパンライブラリースクールの創設の経緯《特別講演録》」『教育学雑誌』43, 2008, p.19-33.
- 12) 前川和子「第二次世界大戦後図書館現職者教育における F. チェニーのレファレンス教育」『図書館文化史研究』30, 2013, p.55-75.



To Mrs. Cheney

A List of Articles on the Reference Work  
(in Japanese Language)  
-- chronological order --

Compiled by Keitaro Amano.  
(November, 1951)

Môri, Miyahiko: Individuals and the public library: an address.  
(Toshokan-zasshi 29: 37-42 Feb. 1917) 毛利宮彦: 個人と公衆図書館

Kotani, Seiichi: From "Mayoiji" ("Missing way") 小谷誠一 「迷路」  
(Tokyo toshokan to sono jiyô 15:5 Ag 1923)

Imazawa, Jikai: Use of the reference books and the reference work  
in the library. (Toshokan-zasshi 55: 2-6 Mr 1924) 今沢兼海: 参考図書の使用と  
図書館での参考業務

Kotani, Seiichi: The reference work at the Hibiya Library (Tokyo)  
(Toshokan-zasshi 55:16-7 Mr 1924) 小谷誠一: 日比谷図書館における参考業務

Kotani, Seiichi: The reference work in the library. (T  
(Toshokan-zasshi 78: 6-8 Ap 1926) 小谷誠一: 図書館における参考業務

Tsukamoto, Katsuo: Reading advice at the Nagoya Municipal (Public)  
Library (Nagoya) (Toshokan-zasshi 22, 12: 300-2 Dec 1928) 塚本勝徳: 名古屋市  
立図書館の読書相談

Hatano, Ken'ichi: The reference work in the library.  
(Toshokan-zasshi 23, 1(110): 7-15 Jan 1929) 波多野健一: 図書館における参考業務

The reference work at the Kyobashi Library (Tokyo) 京橋図書館における参考業務  
(Tokyo-shiritsu toshokan to sono jiyô 53: ? Nov. 1928)

Môri, Miyahiko: Organization and practice of the reference work.  
(Toshokan-zasshi 12: A296-308 Mr 1931) 毛利宮彦: 参考業務の組織と実際 (図書館誌)

Mizumoto, Kunio: The record for questions and answers, and the  
contribution-box. (Bujun Toshokan-ho 5,3: 2-3 Mr 1934) 水本邦男: 質疑応答箱と  
参考業務 (雑誌)

Mizumoto, Kunio: Thoughts of a readers' adviser.  
(Bujun Toshokan-ho 5,4: 2-3 Ap 1934) 水本邦男: 読書指導者の心得 (同誌)

Takenaka, Shigeru: Expansion and establishment of the full-time  
reference librarian in the local central public libraries is urgent  
necessary. (Toshokan-zasshi 28,5: 142-4 My 1934) 武田重徳: 地方公共図書館の  
参考業務の充実に必要 (雑誌)

Onozawa, Fokuro: On the reference work.  
(Gakuyukai-zasshi no.5: 36-8 Mr 1935) 大野次雄郎: 参考業務について (図書館雑誌)

図 "A List of Articles on the Reference Work"